

臍の処置に関する細菌学的病理学的研究

鹿児島市立病院周産期医療センター

関 修一郎, 外 西 寿彦

北野病院小児科

鳥 井 昭 三

日赤医療センター未熟児新生児科

赤 松 洋

天使病院小児科

南 部 春 生

国立岡山病院 (班長)

山 内 逸 郎

新生児において臍が病原微生物の侵入門戸であるという考え方は、一般的に受け入れられてはいないもののその確証はそれほど多くない。疾患が少なくなっているためでもあろうがはたして正しいであろうか、今日再度検討を要する問題と思われる。あるいは、日常臨床においてよく見られる肉芽でさえも、発生は臍断端のどこからなのか、必ずしも明らかではない。この問題に関する数少ない記述のうち Forshall の review によると、臍帯

動静脈の器質的閉鎖に先立ち動脈はスパズムをおこし、静脈は血栓形成がおこなわれるとされ、感染性動脈炎が強調されている。あるいは血栓をメディウムとして大循環に微生物が侵入する可能性もあるかもしれないが、病理形態学的な検索が必要となるであろう。新生児期の死亡例を対象として臍および動静脈を連続的に検索し、一定の標本数が確保された時点で総合的に検討したいと考えている。